

調査報告：「わぎもこがかけてまつらん」の歌の作者推測

2015/7/20

2015/9/4 修正

1 始めに(調査の目的)

わぎもこがかけてまつらんとたまづさとかきつらねたるはつかりのこゑ

この歌は、寛和元年内裏歌合せで読まれたと記録されているが、その歌合せで詠まれた 12 首の内、唯一、作者名が記録されていない。右方として読まれており、右方には、藤原長能と藤原公任の二人だけであるので、この二人のどちらかであると考えられる。

後拾遺集ではこの歌を藤原長能作として 274 番歌に採録している。公任集ではこの歌を、花山院歌合せの記録とし 328 番歌に採録している。長能集ではこの歌は採録されていない。

つまり、この歌の作者は、後拾遺集によれば藤原長能、公任集によれば藤原公任、ということになる。

今回の調査では、他の状況証拠などから、どちらの可能性が高いか、を評価する。

2 検討を開始するに当って分かっている事項

2.1 寛和元年内裏歌合せ

「雁」という題に対して、左方は惟成が次の歌を詠んでいる。

わがせこがたびのころもをうちはへてまつかりがねのいまもなかなむ

右方は詠者不明で以下の歌が詠まれている

わぎもこがかけてまつらんとたまづさとかきつらねたるはつかりのこゑ

2.2 後拾遺集

この歌を藤原長能作として 274 番歌に採録している

寛和元年八月十日内裏歌合によめる 藤原長能

274 わぎもこがかけてまつらん玉づさをかきつらねたる初かりの声

2.3 公任集

「花山院の御歌あはせ云々」の詞書きで始まる 325 番からの 4 首が採録されている。「月」を題として左右 2 首、「雁」を題にして左右 2 首である。このうち、左方は最初に天皇が、次は惟成の歌が採用され、当然であるが、右方として 2 首が公任作ということになる。

今回問題にしているのは「雁」を題としたものであり、左右の2首は以下である。

かり、これしげ

327 わがせこが旅ねの衣打ちはへてまつかりがねは今もなくらん

ひだりがたにて

328 わぎもこがかけてまつらん玉章をかけつづけたる雁金の声

2.4 長能集

長能集には223首が採録されているが、この「わぎもこが」の歌は採録されていない。また、「花山院の歌合せ」という意の詞書きがある歌としては、「花山院の、春恋といふ題をたまわりしかば」、「花山院に、三月になりし時、春の暮をしむ心人人よみしに」、などがあるが、寛和元年の歌合せを示す詞書きはない。

2.5 まとめ

以上により、この「わぎもこが」の歌の作者として表記されているのは、後拾遺集における藤原長能と公任集による藤原公任、それぞれ一つのみ、ということになる。

3 評価1：採録歌の比較

寛和元年歌合せ、後拾遺集、公任集に採録されている表記を確認する。

歌合せ	わぎもこがかけてまつらんたまづさとかきつらねたるはつかりのこゑ
後拾遺集	わぎもこがかけてまつらん玉づさをかきつらねたる初かりの声
公任集	わぎもこがかけてまつらん玉章をかけつづけたる雁金の声

3.1 構成の違い

3首ともに違いはない。

3.2 言葉の違い

第1~3句：ほとんど違いはない

第4句：かきつらねたる／かきつらねたる／かけつづけたる

第5句：はつかり／初かり／雁金

第4句は、「かけて」から「たま」につながり、「たまづさ」として手紙、または使者としての「かり」を引き出しているのであろう。とすれば、「手紙」につながぐためには「かき(書き)」の方がスムーズである。公任集では、「わぎもこがかけて」、「かけつづけたる」と2か所で「かけ」が使われていることが特徴的といえるが、その効果は筆者にはよくわからない。

第5句は、「はつかり」と「雁金」の違いがある。「雁金」は起源としては「雁が音」即ち「雁の鳴き声」であったことを考えると、「雁金の声」では意味が重複する。ただし、すでに万葉集で「かりがね」から「鳴き声」の意味が外れて単に「雁」の意味で使われている例が少なからず見られる。たとえば以下である。

2195 かりがねのきなきしなへに

2208 かりがねのさむくなきしゆ

2278 かりがねのはつこゑききて

2182 かりがねはいまはきなきぬ

従って、「雁金」は「雁」の意ととってよいだろう。では「はつかり(初雁)」と「雁」はどう違うのか。もちろん意味するところは違うが、「その秋に初めて聞く雁の鳴き声」というときに「初めて」という言葉を使うことによってどのような効果があるかということ、本論で問題としている歌に関して言えば、筆者には特別なものは感じられない。

以上をまとめると、歌合せ、後拾遺集、公任集の三様の表現に、特別な違いはないと考える。

4 評価 2：キーワードの使用頻度の比較

4.1 方法

対象歌に使われる言葉をキーワードとして選び、二人の歌集で使用されている頻度を評価する。

歌合せでは、左方、右方の歌人がそろったところで、題が発表され、即座に歌を詠むことが要求されているものと考えられる。その場合、歌人にとって使いなれた構成や言葉が使われる可能性が高くなるものと考えられるため、歌人の言葉の選択の傾向が、即興的に詠まれた歌に反映している可能性が考えられる。

二人ともに家集があり、それによって、作歌活動の大きな部分がカバーされているものと考えてよいため、家集との関係に相違があらわれることが期待される。

4.2 キーワードの選択と使用度の比較

再度、歌を示す。

歌合せ	わぎもこがかけてまつらんたまづさとかきつらねたるはつかりのこゑ
後拾遺集	わぎもこがかけてまつらん玉づさをかきつらねたる初かりの声
公任集	わぎもこがかけてまつらん玉章をかけつづけたる雁金の声

このなかからキーワードとして以下を取り上げる。

わぎもこ

たまづさ

はつかり

かりがね

以下の使用状況の調査では、公任集における当該歌は除いて考える。

- (1) わぎもこ……公任集、長能集のいずれにもなし。
- (2) たまづさ……公任集、長能集のいずれにもなし。
- (3) はつかり……公任集になし。長能集に1例。

179 わかれにしなはしろみつをたつねはやあきのやまたにはつかりそなく

- (4) かりがね……公任集に1例、長能集になし。

247 おもひしるひともなきよにうらやましようきよをすててかへるかりかね

4つのキーワードについては、使用例が多くても1例で少なすぎるため、これは評価の対象外とする。

4.3 キーワードの選択=2回目

結句の末尾が「の声」と体言止めである。新古今集あたりで体言止めが増えてくる(*1)が、この時代ではそれほど多くはないので、結びが「のこゑ」という歌は特徴的であると言える。その使用例を調査し、特に結びとして使用されているかどうか注目することにする。さらに、「のこゑ」以外の場合の「こゑ」についても調査する。

(1) 公任集

(1-a) 「の声」を含む歌

次のように9首ある。

6	おほつかなーいつこなるらむーはなさかぬーかすみのうちのーうくひすのこゑ
9	はなさきしーひよりまつかなーたつぬやとーみわのやまへのーうくひすのこゑ
20	めつらしきーたまのうてなのーはなのかけにーきかまくほしきーうくひすのこゑ
98	よろつよのーあきをこめたるーやとなれはーたつねてすめるーすすむしのこゑ
100	たつねくるーひともあらなむーとしをへてーわかふるさとのーすすむしのこゑ
244	つねならぬーねにそきこゆるーやまさとのーやまへにきなくーうくひすのこゑ
322	うくひすのーさきにかきみかーきみつるをーかつうちいてむーうめかえのこゑ
511	つきかけにーこちくのこゑそーきこゆるなるーふりにしいもはーまちやかぬらむ
528	ゆきかはるーはるをもしらすーはなさかぬーみやまかくれのーうくひすのこゑ

備考：511番歌における「こちく」は胡竹で笛の一種である。

(1-b) 「の声」以外の「声」

12 首ある。12 首とは、21, 59, 61, 99, 112, 191, 193, 212, 266, 300, 467, 527 である。

21	しつえにて—こゑををしみし—うくひすは—はなのさかりを—まつにそありける
59	まちえても—たたひとこゑを—ほととぎす—ねさめかちにて—あかすころかな
61	ほととぎす—あかてややまむ—まちきつる—けさのねさめの—たたひとこゑを
99	としへぬる—あきにもあかす—すすむしの—ふりゆくままに—こゑのまされる
112	としことに—とこめつらなる—すすむしの—ふりてもふりぬ—こゑそきこゆる
191	うくひすの—こゑをまつとは—なけれとも—はるのしるしに—なにをきかまし
193	きりふやま—ふくこからしに—こかれたる—をよりそこゑは—しるへかりける
212	ふゆのいけの—こほりゆくらむ—みつとりの—ゆふかくさわく—こゑきこゆなり
266	きてふして—とこゑひなれは—ころもてに—かかるたまとも—さめてこそみれ
300	ふえたけの—よふかきこゑそ—きこゆなる—みねのまつかせ—ふきやそふらむ
467	ことのはの—ちるやまのをは—あきかせの—すくるままにそ—こゑまさりける
527	たにのとを—とちやはてたる—うくひすの—まつにこゑせて—はるもすきぬる

(2) 長能集

(1-a) 「の声」を含む歌

1 首のみである。

178	みかりする—ひとやことなる—はしたかの—とかへるのへの—すすむしのこゑ
-----	-------------------------------------

(1-b) 「の声」以外の「声」

11 首ある。

20	おいらくの—こゑかれにけり—ほととぎす—きなきとよませ—はちかくるへく
35	こゑたえす—やまほととぎす—きなけとも—みやこのひとそ—わきてこひしき
36	ほととぎす—しのはぬこゑに—つけつつも—わくらむひとや—いつれなるらむ
113	さみたれは—すきにたりとや—あしひきの—やまほととぎす—なくこゑもせず
114	さみたれは—よにうきものと—ほととぎす—なきかくれにし—こゑなきかせそ
131	わかやとの—のきはのうめや—さきぬらむ—うくひすきなく—こゑきこゆなり
140	ひとりぬる—ひともこそあれ—ひとつかひ—なくなるをしの—こゑやかなしき
150	くちにけり—すましとさとる—こころには—ふるさとこゑの—くるまにそのる
176	をきかせも—ややふきまさる—おとすなり—あはれあきこそ—ふかくなるこゑ
183	ひとりぬる—ひともこそあれ—ひとつかひ—なくなるをしの—こゑやかなしき

4.4 本章のまとめ

公任と長能の歌で明確な相違は1件だけだった。公任集では「の声」を含む歌が9首あり、それを結びとする歌が8首であったのに対し、長能集では「の声」を含む歌は1首のみで、結びにあらわれるものであった。

公任集で、結びを「の声」とする8首中、6首が「うぐひすの声」、2首が「すずむしの声」だった。結び以外で使われた「の声」は「こちくのこゑ」で生物ではなく笛の音である。これに対し、長能集で「の声」を結びとする歌は、1首で「すずむしの声」だった。

「雁の声」を意味する歌は、公任集、長能集に何れにもなかった。

「の声(こゑ)」以外の「声(こゑ)」の使用例は、公任集で12首、長能集で11首だった。「かりの声」につながる歌はなかった。

5 考察

「の声」を結びとする歌は、公任によっては8首において詠まれているが、長能においては1首のみだった。この点については、本論の対象歌の作者としては公任説に傾く。ただし、他に根拠と成りうる事項がないため、今回の評価結果は、大変に弱い状況証拠の一つでしかない。たとえ状況証拠であっても、それが5個、10個と集まり、その大多数が一方の歌人との関連性を示す、とということになれば、作者を推定することができよう。

なお、疑問な点がいくつか感じられた。

たとえば、歌合せ、後拾遺集では結句が「初雁の声」であるのに対し、公任集では「雁金の声」である点である。これについては、作者が歌合せの後に推敲して修正した可能性は考えられるだろう。その場合は、後拾遺集では歌合せの歌を採用したことになるが、歌合せの記録では作者名が記録されていない、という問題が残る。公任集は1044年頃に成立とされ(*2)、後拾遺集は奏覧が1088年とされるが、後拾遺集の編集において公任集が参照されたかどうかについては筆者は知り得ていない。

また、歌合せにおいて、「雁」の題で左右が詠むときに、左方が初句を「わがせこが」としたのに対し、右方が「わぎもこが」とした点である。このように対応する言葉で歌いだしたということは、両者が示し合わせていた、ということ以外には考えにくい~~が、その可能性も認めがたい。~~
~~歌合せとは即興的に詠んだ歌の優劣を競うものであるからである~~ (*)。この点では最後の「虫」という題において、左右が「秋来れば」、「秋ごとに」と、同じ言葉で詠い出すのだが、これは、「虫」から「秋」が連想されることから、不審なことではない。

6 参考文献

和歌に関しては、寛和元年内裏歌合せは、新編国歌大観 第三巻 私家集編Ⅰ歌集、また公任集、長能集は、新編国歌大観 第五巻 歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編 歌集 を参照した。また適宜、日文研データベースの「和歌データベース」(<http://tois.nichibun.ac.jp/database/html2/waka/menu.html>) を参照した。

(*1) 日本古典文学大辞典 簡約版 の新古今和歌集の項に「体言止めの作品は極めて多い」とある。

(*2) 日本古典文学大辞典 簡約版 の公任集の項。

(*3) 2015/9/4 修正。当初は歌合せとは題を与えられて即興で読んで競うもの、と思い込んでいたが、そうでないものも多数ある。「時代不同歌合」のように八代集全体から抜き出した、という極端なものまである。また小式部内侍の「大江山……」の歌のエピソードのように事前に歌を準備しておく時間があるものもある。日本古典文学大辞典の「歌合」の項では、【分類】の(六)に「和歌採用の条件による性格的分類」があり、例として、(4)当座即詠の撰歌合、(6)即詠即番の歌合 の他に、「時代不同の撰歌合」、「新詠旧作混用の撰歌合」などいろいろなタイプが挙げられている。「寛和元年内裏歌合せ」がどのようなものであったのかは筆者には分かっていない。"疑問な点"として述べた部分なので、そのまま疑問として残しておく。